

ウンシュウミカンの高密度栽植・主幹形仕立て栽培における好適栽植密度

[要約]

ウンシュウミカンの早期成園化のための高密度栽植・主幹形仕立て栽培では、定植3年目から10 a換算で3～6トンの収量と糖度の比較的高い果実が得られる。

初期の11年間の収量、果実品質等から見た好適栽植密度は樹間2×1 m（10 a当たり500本植え）である。

[担当者] 栽培部 小沢良和

[背景・ねらい]

ウンシュウミカン苗木植え付け後の未収益期間を短縮する早期成園化法としての高密度栽植・主幹形仕立て栽培では、定植3年目から相当の収量と比較的高品質な果実が得られ、改植・新植法として普及をみている。しかし、樹齢の進行に伴い樹冠の拡大による密植の弊害が懸念されるので、主幹形を維持しつつ、定植後13年間の樹冠容積の拡大、収量、果実品質等について試験し、中長期的に見た好適栽植密度について検討した。

[成果の内容・特徴]

1. 定植3年目から結実を開始し、1樹当たり収量は、330本区（樹間2×1.5 m）で多く次いで500本区（2×1 m）で、両区では10～15 kgの間で推移した。1000本区（樹間2×0.5 m）は少なく、5 kg前後で漸減傾向で推移した。（図1）。
2. 10 a換算収量は3トンから8トンの間で推移し、結実2年目までは1000本区が多く、3年目以降は500本区が最も多く5～8トンの間で推移した。330本区は7年目までは最も少なかった（図2）。
3. 樹冠容積は330本区で大きく1 m³程度、1000本区では0.5 m³程度と小さく、結実4年目までは増加傾向で、その後はほぼ一定の大きさを推移した（図3）。
4. 果汁中糖度は1000本区で高く、次いで500本区で、330本区では低い傾向にあった。クエン酸含量は、一定の傾向は見られなかった（図4、5）。
5. 以上の結果から、高密度栽植・主幹形仕立て栽培では、定植3年目から相当の収量が得られ、品質面でも優れ、この傾向は結実開始から11年を経過しても同様であった。好適栽植密度は10 a換算収量及び品質面から見て、500本（樹間2×1 m）が優れると考えられた。

[成果の活用面・留意点]

1. 早期成園化のための高密度栽植栽培では、樹を主幹形仕立てするか、計画的な間伐を行うなど、密植の弊害を回避することが重要である。

[具体的データ]

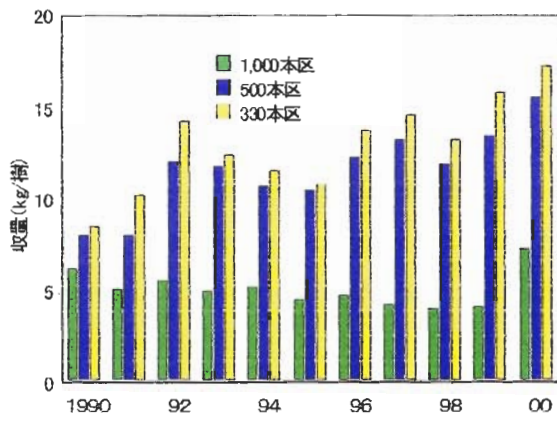


図1 1樹当たり収量の推移

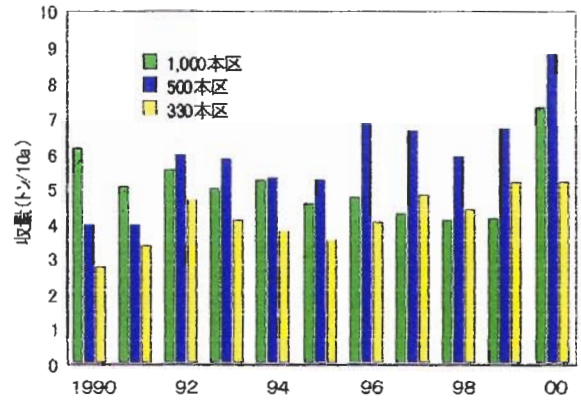


図2 10a換算収量の推移

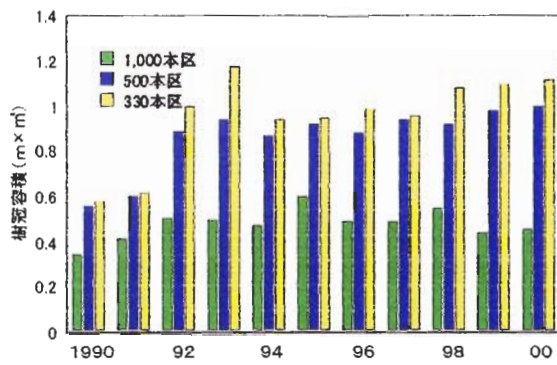


図3 樹冠容積の推移

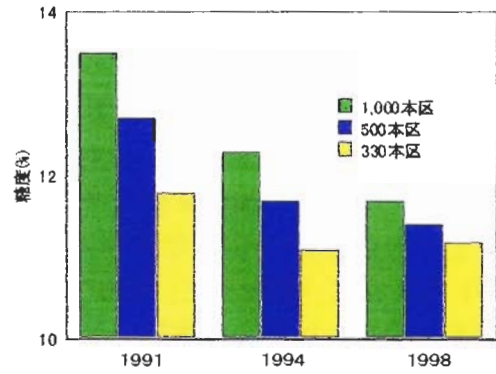


図4 年次別果汁中糖含量

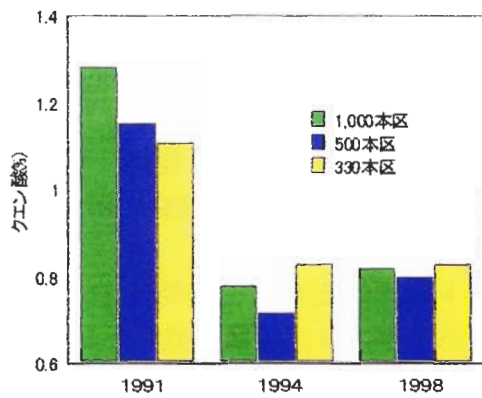


図5 年次別果汁中クエン酸含量



↑

500本区

← 330本区

